

タイトル	M. M. ドブロトゥヴォールスキーのアイヌ語・ロシア語辞典(24)
著者	寺田, 吉孝; , ; 安田, 節彦; ,
引用	北海学園大学学園論集(176): 127-149
発行日	2018-07-25

# M. M. ドブロトウヴォールスキーの アイヌ語・ロシア語辞典 (24)

(カザン, 1875 年)

M. M. ドブロトウヴォールスキー著  
寺 田 吉 孝 訳  
安 田 節 彦 訳

## 訳者まえがき

辞書本編に続いて、以下の通り、M. M. ドブロトウヴォールスキーによる 13 編の論文や記事等が補遺として掲載されている。

1. プフィツマイエール (Pfizmaier, Пфицмайер) の著作『アイヌ語の構造について (ÜBER DEN BAU DER AINO-SPRACHE)』の分析
2. アイヌ関連文献からの抜き書き
3. アイヌの数
4. アイヌの宗教, 哲学, 詩歌
5. アイヌの医学
6. アイヌの食
7. アイヌの住まい
8. アイヌの衣服
9. アイヌの生業
10. アイヌの風習と慣習
11. 季節と 12 の月
12. 名辞の変化と動詞の変化, 語の配置, 小詞とその用法
13. 目次

今回は、「1. のプフィツマイエールの著作『アイヌ語の構造について』の分析」の訳出である。プフィツマイエールの著作がドイツ語で書かれているため、原著は、ロシア語、ドイツ語、アイヌ語が混じっており、かなり複雑な構成になっている。訳文では、プフィツマイエールの著作から抜粋されたドイツ語の部分は訳文に組み込むよう配慮した。

なお、13. の目次は、辞典全体の目次でも、補遺の目次でもない。不可解なものである。

(寺田吉孝 記)

M. M. ドプロトゥヴォールスキーの

# アイヌ語・ロシア語辞典への

## 補遺

# 1. プフィツマイエール (以下 Pf.) の著作『アイヌ語の構造について (ÜBER DEN BAU DER AINO-SPRACHE)』の分析

## 正書法

Pf. が利用したアイヌ語辞書は、ラ・ペルーズ (La-Peyrouse) (160 語) とダヴィドフ (Давыдов) (約 2000 語) のもの、そして、とりわけ日本で出版されたアイヌ語辞書『藻汐草』(約 3000 語；部分的に解釈入りのフレーズを伴う) であった。「ダヴィドフの語彙集は、発音全般や多くの個々の語の正しい読みに関して手引きとなった。また、様々な方言についての結論を導き出すのにも部分的に役立った」<sup>(1)</sup>。

アイヌ語の語の正書法についての Pf. の誤りは、彼がアイヌ語のまったくの門外漢としてダヴィドフや藻汐草に記録された発音を盲目的に信じなければならなかったことにあるという一方、また、これらの資料は両方ともアイヌ語の正書法に関してひどい誤りを犯しているということにある。別々の場所で別々の情報源から、しかも何の批判もなく、人間の音声の生理学や病理学の知識もまったくなしに集められている。そのため、これら二つの語彙集は、アイヌ語の正書法において、たえず辻褄があっておらず、ありとあらゆる語の正書法における相違を説明できていない。このことから、同じ語が幾通りか書かれているが、その正書法の内、どの正書法がより正しいのか何の説明もないといった奇妙な現象が生じる。たとえば、*etu* 「鼻」は、Pf. では *etu*<sup>(2)</sup> (эту), *eto* (это), *itu* (иту), *idu* (иду), *ido* (идо) と書かれている。つまり殆ど何が何やら分からない。*ipè* 「食べる」は、*ibe* (ибе), *ebi* (эби) および *ebe* (эбе) と書かれている。*Tétara* 「白い」は、*tetaru* (тэтару), *retaru* (ретару), *tedaru* (тэдару), *detaru* (дэтару), *dedari* (дэдари), *didari* (дидари) などと書かれている。一体どの正書法が正しいのかという疑問がわく。Pf. は、それぞれが正しいと考え、また、正書法の相違をアイヌ語の様々な方言の差異に帰していると考えている。この見解がまったく正しいと言えるのは、いくつかの語や音の場合だけである。非常に多くの場合、正書法の相違は、もっぱらアイヌ語の音に対する不案内、つまりアイヌ語の無知から来ており、方言の相違によるものではまったくない。筆者は自らの経験からこれを行っている。何の根拠があっても不明だが、Pf. はアイヌ語には東松前、西松前、サハリンの三つの方言があると考えている。本当にそうだろうか。サハリン島にいたロシア兵士たちだけで編まれたアイヌ語語彙集を見ると、同じ語がいろんな風に、しかも Pf. とまったく同じように書かれていることが分かるだろう。しかし、このことからアイヌ語の方言の違いについて結論を導くのは、その土地で言葉を学ばなかった者だけだろう。方言の違いについて述べるためには、所与の語に

(1) 『アイヌ語の構造について』からの引用。

(2) 原注：ラテン文字で書かれている語はすべて Pf. の著作から変化を加えずそのまま取り上げている。

おける或る一定の音がたえずこれこれの地方で見受けられ、他の地方ではたえずこれこれの音に置き換わり、さらに別の地方ではこれこれの音にのみ置き換わる、等ということを知る必要がある。Pf. はこれをする術がなかった。というのは、編者自身がアイヌ語の音をよく知らずに、そのときにどう聞こえたかだけで、音を混同して編んだ語彙集を Pf. が使ったからだ。その時々々の音の聞こえ方は極めて多様でありうる。まず指摘する必要があるのは、アイヌ語には他の民族の言語には存在しない幾つかの音があり、これらの音をロシア語とかドイツ語とか日本語の文字で表すことはできないということである。その音に最も適した文字を当てなければならない。その音には普通一つではなく二つか時には三つの文字が適することがある。ここにアイヌ語の語の発音が見せかけだけ相違している第一の根源、つまりいつわりの方言を採用する第一の根拠がある。これに関する詳細に関して読者は拙論「アイヌ語の正書法について」で見出すだろう。ここでは、幾つかの例だけで留めておく。字母 *b* (*b*) と *n* (*p*), *c* (*s*) と *u* (*sh*), *o* (*o*) と *y* (*u*), *e* (*e*) と *i* (*i*) などの字母は、アイヌ語では中間的などっちともつかない発音がなされる可能性があり、実際に発音されている。したがって、同じアイヌが同じ時に話すとき、ある人には *nobori* (нобори) と、別の人には *nuburi* (нубури) と、さらに別の人には *núpurí* (нүпури) 「山」と聞こえ、また、ある人には *seseku* (сесеку), 別の人には *schescheky* (шешечу) と聞こえ、また、ある人には *ebui* (эбуй), 別の人には *ibui* (ибуй), さらに別の人には *epúj* (эпүй) 「花」などと聞こえても、驚くに当たらないのである。しかし、中間的な音そのものの正書法のあいまいさに加え、上記のように中間的な音に慣れていなかったのが、ダヴィドフも藻汐草の編者たちも、子音の後にくる母音の記述において曖昧さを残す原因となった。その例として、*syúruku* (「毒」) という語を挙げよう。この語は Pf. では *schuruku* (шуруку), *sioruku* (сиоруку) および *sioroky* (сиороку) と書かれている。私が本書でゴチックの *u* で表した音の存在は、Pf. にとっては全く未知のままであった。ダヴィドフも藻汐草も、合成子音 *mp* (*tr*) の意義を Pf. に教示しなかった。そのため Pf. では *tre* (*trye*) (あるいは *tri* (*tri*)) の代わりに *re* (*pe*) と *te* (*tə*) がある。さらに、「綿」という同じ意味を持つ *reba* (*peba*) と *deba* (*dəba*) という単語さえもある。ここには、合成子音 *tr* (*tr*) からは、中間的などっちつかずの音<sup>(3)</sup> を与える字母 *t* と *d* の生理学を知っている者のみ分かるただ一つの痕跡が残っている。他の間違いのもとには、アイヌが異なる3つの民族、日本人、ロシア人、ギリヤーク人と絶えず接触しているということにある。アイヌ語の音はこれらの民族の言語のどれとも類似していない。それぞれの民族がアイヌ語の音を勝手に自分流にゆがめている。アイヌがこのように音がゆがめられていることに慣れているのは、一つには礼儀上から、また一つには音をゆがめている者のまねをして物笑いの種にしているからである。

(3) 原注 Pf. は、文法の法についての論文の中で、「しかし、さらに、アイヌ語における *t* と *r* の音もまた互いに混同されている (ausserdem werden aber auch die Laute *t* und *r* in der Aino-Sprache mit einander verwechselt)」と率直に述べている。

このようなアイヌ語の語の乱れは、音ばかりでなく、接触する民族のそれぞれの言語に応じて、アイヌ語の語結合つまり文法にも生じている。このことから、アイヌがアイヌ語でギリヤークと話すときは、まわりのロシア人や日本人は理解できない、また、ロシア人と話すときは、まわりの日本人やギリヤークは理解できない、等のことが起こる。まるで異なるアイヌ語の方言を話しているかのようなのである。一方、よく知っているアイヌの前でアイヌ語の言葉を間違えて発音すると、そのアイヌは笑って、ギリヤーク人はそんな風に喋るとか、それは日本語のフレーズだと言う。たとえば、makhnekùあるいはmakhtekù「女性」をギリヤークの前ではmátsika、日本人の前ではmínogu、ロシア人の前ではmátakaなどと発音する。Pf.はこのような誤りのもとを疑いもせず、彼が頼りとした語彙集を盲目的に信じた。しかしながら、それらの語彙集の二つとも、日本人とともに暮らし、長い間日本人の影響を受けたアイヌが使っている語から構成されている。日本人がアイヌ語の音に慣れるのがどんなに難しいかは、サハリン島に5年いた私が正しくアイヌ語の言葉を発音する日本人に一人も出会わなかったことから分かる。アイヌとともに南クリル諸島、松前、サハリン島で10年以上暮らしたアイヌ語の通訳でさえ、アイヌ語をうまく話すのにもかかわらず、発音は耐え難くひどかった。日本人の発音の特徴は、アイヌ語の硬音<sup>(4)</sup>の大多数をアイヌ語にとってはしばしばまったく固有でない軟音<sup>(5)</sup>に変えてしまっているということにある。

このようにして、アイヌ語の語頭では**h**の音はまったく見受けられないのに、páse「重い」からbase (басе), pǎjkara「春」からbaikaru (байкару)が生じた。**r**つまりローマ字のgはアイヌ語にはまったく固有ではないにもかかわらず、gekaj「古い」からchigai (хигай), hekai (гекай) およびhigai (гигай)が作られた。これと同じところに属するのは, ivanke「利用する」の代わりにjuwangi (юванги), ruj「穴」の代わりにbui (буй) およびboi (бой), tétaraやetùの代わりにdedariやdidari, iduやidoなどの間違いである。日本人は、多くの語の中で、**r** (**g**)と**x** (**kh**)の字母を**φ** (**f**)に変えてしまっている。たとえばfeuke (реуке「曲がった」), afun (ахгунь「中へ」といった語の中で。また、日本人は、文字**φ** (**f**)をまったく余分な追加になってしまう場所に挿入してしまっている。例えば、喉頭音の**k**につけて、igòkあるいはigòkh「買う」の代わりにihokf (игокфъ)としたり、kunne「黒い」の代わりにkfunne (кфунне)とする。あるいは、唇音の**p**につけて、たとえば, turep「いちご類 (Pf. ではeine Art Lilie「百合の一種」)」の代わりにturipf (турипфъ), またaptùあるいはakhtùの代わりにapftu (апфту)とする。もっとも、唇音の**p**はあらゆる唇音の字母と同じように、帯気音の**x** (**kh**)に変わり得る。最後に、アイヌ語の正書法におけるもう一つの、しかもかなり重要な誤りのもとは、Pf. が利用した語彙集の编者たちのアイヌ語の音に対する不慣れやアイヌ語正書法における不注意、誤りなどから生ま

(4) 口蓋化なしに発音される音。

(5) 口蓋化されて発音される音。

れた。この誤りのもとがどれほど重大かは、もうすでにアイヌ語正書法についての論文のなかで示した。

さらに、Pf. は *i* を用いるため、*и* (*i*) と *й* (*j*) の見分けがつかなくなっていること、また、アイヌ語で大きな役割をするロシア語の *ь* で表される記号がないということを付け加える必要がある。それどころか、説明もなく何も表さない記号が導入されている。たとえば *tschòkai* (чокай) のように。さらに非常に重大な欠陥は、アクセント記号がないことにある。アクセントはしばしばアイヌ語の語の意味をまったく変えてしまうからである。たとえば、*ékari* は「歩き回る」、*ekári* は「出会う、知り合いになる」。また、*átaj* は「椅子」、*atáj* は「賃金」など。さらに、Pf. は語を音節に分けることをなぜか有効だと考え、それを極端に進めた。つまり、彼の論文の中に *to-i-wa-no* 「遠い」(*ferne*)、*ru-n-ne*、*afun-nu-wa* などに出くわすのである。その理由は、彼はフレーズの中の複数の完全な語<sup>(6)</sup>、たとえば、主格の語とそれに伴う所属生格の語などを互いに結び合わさざるを得なかったからだ<sup>(7)</sup>。このような語の音節への分割はフレーズ全体の理解に悪い影響を与えた。というのは、直前の語の最後の音節がどこに入るのか、当該の語か、あるいは、その次の語か、その次の語の最初の音節か、ときに分からなくなったからだ。実際、これが原因で、Pf. は以下に見るように、語の解釈で絶えず混乱している。このようにして、Pf. によって無批判に許容されたアイヌ語の正書法は何の役にも立たない。アイヌ語の研究の際、この正書法を指針とすることはできない。また、アイヌ語を自分で修得した人、従って Pf. よりもよくアイヌ語を知っている人、どのような誤りがどこにあるかが分かる人にとっても、おそらく、この正書法は、いくつかの比較検討材料としてしか役に立たないだろう。

このためアイヌ語の語彙集の編纂に際して、Pf. の著作にある語は、アイヌ語辞書やアイヌに関する論文の他の作者の著作にある語と同様に、細心の注意を払って使う必要がある。ましてや、多くの語の意味がその音と同じく歪められているからなおさらである。例として Pf. の論文の中からいくつかの語を挙げよう。*Schiri-popke* あるいは *shir-popke* は、「暑い時期」または「暖かい天気」(*siri* 「天気」および *pòkhke* 「暑い、暖かい」) の代わりに「暑さ (*die Hitze*)」と訳されている。*Tschochtscha* は、「的に当たる (もちろん、どんな道具で放つても)」の代わりに「矢で撃つ (*mit einen Rfeile schiessen*)」と訳され、*Atsha-po* は、「おじ」の代わりに「親戚 (*ein Verwandter*)」と訳され、*Nischioro-an* は、「空がある」(*nísoro* 「空」および *an* 「ある」; フレーズの編纂者はもちろん「見える」という語を暗示していたのだ) の代わりに「陽の光 (*Sonnenschein*)」と訳され、*Nischitta* は「朝」の代わりに「明日 (*der morgende Tag*)」と訳され、*Schukup* は「成長する」の代わりに「育てる (*ernähren, aufziehen*)」と訳され、*Pase* は「重い」の代わりに「何度も」と訳されている。以下ではさらに多くの別の間違いに出会う。

(6) 接頭辞とか接尾辞ではなく、語と認められるものという意味で用いられている。

(7) Pf. は、アイヌ語の知識がほとんどなかったため、文、フレーズを語の単位に分割することができなかったとドプロトヴォールスキーは判断しているようである。

Pf. によって編まれたアイヌ語文法は別問題である。ここでは彼は非常に限られた手段でとても多くのことを作り上げた。しかし、全く同じ理由によって、多くの間違いを避けることができなかったにもかかわらず。間違いの主要な源は、ここでも彼が使った語彙集を全く信頼しきっていたことにある。しかし、アイヌが音においてばかりでなく、語の結合においても、話し言葉の中でなされる間違いに慣れていることが分かっている。たとえば、もし誰かがキャフタとかウラジオストクで我々と中国人の会話を記録したとしたら、例えば、

—お前のパイプ売れよ。売らないか？

—俺の売れ。

—お前のだ、いくら欲しいか？

—俺のは1ルーブルだ。

—1ルーブル。高い。

—高い、そんなことない。お前のはいくらだ？

—俺のは、50コペイカだせ。

—50コペイカ、少ない。俺の、売るな。

このような会話からロシア語の文法の規則を導こうとしても、ロシア語が低い発達段階にあり、もちろん、格変化も人称変化もないと評価するだろう。

同じことが Pf. にも起こった。彼は、アイヌ語の中に格変化も人称変化もほぼ全く見えていない。その代わり、必要もなく何十という、その場限りの、さらに、しばしば存在もしていない小詞を持ち込んだ。例えば、того「あのう」、тово-вонъ-ди「そのう、ほら」、тово-вонъ-ка「あのう、ほら、さあ」、как бишь оно「ええと、ほら」といったロシア語の語のような小詞を持ち込んだ。我々は彼の文法を順に分析する。

## 名 詞

名詞を研究する際、筆者は、複数と単数は区別されないと述べている。このことは、大多数の語に関してのみ正しい。なぜなら、いくつかの使用頻度の高い語には、複数の印が存在することがあるからだ。たとえば、te「手」、téki「手(複数)」、kemà「足」、kemáki「足(複数)」、imà「歯」、imáki「歯(複数)」、sis'「目」、siki「目(複数)」、útarà「人、民族」、útare「人、民族(複数)」、am「爪」、amigi「爪(複数)」など。事実、会話では、とくに外国人との会話では、アイヌは複数を表す印を使うことを好まない。しかし、このことは言語の構造に全く依存しておらず、一つには外国人との会話の中で話し言葉を歪曲してしまうことを余儀なくする社会的条件により、また一つには他の論文で私がすでに述べた自然の影響による。

Pf. は、複数形を認めなかったので、複数形に代わる表現を見つけようと考え、実際に見つけている。しかし、全てが上手くいっているわけではない。例えば、彼は語の繰り返しによる複数を



指摘し、例として次の語を挙げている。*bo-po* あるいは *po-po* (Söhne 「息子たち」), *okkai-po-po* (Männer 「男たち」), *menoko-po-po* (Weiber 「女たち」)。複数形の印としての *po* 「子供」という語の繰り返しに関しては、私は反論しない。なぜなら、この目的での語の繰り返しは、(単数の意味で語の繰り返しなしで使われる) 他の語でも出くわすからだ。たとえば、*tóki* 「筋、縞」と *tóki-tóki* 「筋(複数)、縞(複数)」。そのため *po-po* という語に関しては Pf. では誤って訳されているとだけ指摘できる。つまり、*po-po* は「子供たち」(「息子たち」ではなく)、*okkai-po-po* は「息子たち」(「男たち」ではなく)、*menoko-po-po* は「娘たち」(「女たち」ではなく)を意味する<sup>(8)</sup>。しかし、同じ音の繰り返しが見られる大多数の語が形成されたのは、複数を示すためにはないということをここで付け加えておかないわけにはいかない。つまり、*nikè-nikè* 「螢」は、単数でも複数でも *nikè-nikè* となる。単に *nikè* だけでは「螢」ではなく「光る」を意味する。Pf. によって引用されたその他の語も同様である。*scha-scha* 「音(複数)」(*Töne in der Musik* 「音楽における音(複数)」)と *pas-pas* 「石炭、木炭(複数)」(*Kohlen* 「石炭(複数)」)。つまり、石炭、木炭(単数)という語をアイヌ語で *pas'* と訳してはいけない。というのはアイヌは石炭、木炭(単数)という語を表すのに *sumi* (火の消えた炭) や *usà* (火のついている炭) が用いられるからだ。一方、*pas'* という語はアイヌ語で「墨、インク、黒い染料」を意味する。このように、*pas'-pas'* は *pas'* という語からできた複数ではなく、次の意味を持つ個別の語である。1) 「灰」、2) 「前足(複数)」(たとえば、トドの)、3) 「(日本人によって火鉢で使われている)木炭、石炭(複数)」。この *pas'-pas'* という重複語は最後の意味では「たくさんの木炭、石炭」をも意味する。*pas'-kara* 「木炭を燃やす」および *pás'-kara-tishè* 「炭焼き小屋」(*kara* 「作る」、*tishe* 「家」から)の複合語から分かるように、もちろん、単一の *pas'* から形成された。ここでは、重複語の *pas'-pas'* は、単一の *pas'* に取り換えられているが、重複の意味を持っている。すなわち「石炭、木炭(単数)」ではなく「石炭、木炭(複数)」を意味している。

*Utare* 「人々」(元々は *untara* 「住む」から派生した「住民たち」の意、Pf. では *Genosse* 「仲間」)は、実をいうと、複数の代用ではない。なぜならそれ自体が *utara* 「人間」からできた複数だからである。従って、*utare* 「人々」と結合されるすべての不変化語も複数の意味になるだろう。しかし、アイヌは外国人との会話で *utare* も *utara* も単数の意味でも複数の意味でも通常使う。アイヌは、互いの間でさえ *khekátare* とか *kekátsti-utare* ではなく、*khekátara* とか *khekátsti-utara* 「子供たち」(*khekátsti* 「子供」からの派生)と言う。

*poronno* 「たくさん」(Pf. では間違っって *gross* 「大きい」、*in grosser Ausdehnung* 「大規模に」)による複数形の生成は、Pf. によって考え出されたものだ。*Tsikapp-rapp-poronno* は「羽(複数)」(*Federn* 「羽(複数)」)ではなく、「多くの鳥の羽」を意味する。もしアイヌに2本の羽を指して、

(8) 原注 これらの例において、語の発音や正書法が問題となっていないすべての他の例と同じように、Pf. の正書法をそのままにしている。*okkai* は *ókhkayu* 「男性」、*ménoko* は *makhneku* 「女性」の間違いにもかかわらず。Pf. の著作に出てくる語を訂正したり、その訂正を説明したりすると、論文が不必要に長くなるだろう。

「私にこの羽をくれ」という時、羽という語を *tsikapp-rapp-poronno* と訳すと、彼はあなたにここにはたくさんの羽はなく、2本の羽があるだけだというだろう。

Pf. が *mehrere* 「いくつかの」と訳した *basche* あるいは *pasche* (*páse* 「重い, 重要な」) という語や *alle* 「すべての」と訳した *obitta* という語 (*opis'ta* 「いたるところで」, アイヌ語の *pis'kán'to* の代わりに日本人がつくった語) による複数形の生成については述べる価値もない。たとえ、これらの語が正しく訳されていたとしても、Pf. には、これら二つの語に留める権利はなく、複数または少なくとも二つであることを表す何十もの代名詞、数詞、形容詞および副詞を付け加えなければならなかっただろう。*poronno* (たくさん) という語と同様に、これらの語のそれぞれには固有の意味があるので、複数の単なる代用としてそれらを利用することはできない。なぜなら、複数の概念にくわえ、それぞれの語に固有の概念も持ち込まれるからだ。たとえば、「*tan kotàn ta útare an, kasà yúkhkeno korò* (この村には重い梅毒に罹っている住民がいる)」というフレーズは、*útare* (住民たち) という語が複数になっていなければ、*poronno* (たくさん) や *obitta* (すべての) を付け加えて、取り替えられることができないだろう。なぜならフレーズの意味がまったく違ったものになるからだ。しかし、*útare* の代わりに複数で語形が変化しない *ajnu* (人) という語を使えば、アイヌ語では何の付け加えなしでも複数と考えられるだろう。なぜなら、もし村で重い梅毒に罹っている人が1人なら、はっきりさせるために「*tan kotan ta sine* (1人の) *ajnu an, kasa yúkhkeno koro*」(この村には重い梅毒に罹った1人の人がある) となるだろう。他の場合にもアイヌはこのように対処する。

Pf. は、名詞の語尾の分析に際して、言うべきことについて、また、言うことができる多くの本質的に重要なことについて、何も述べなかった。そして、全く書くべきでないことについて書いた。例えば、Pf. の論文には、以下のことが挙げられている。

1) Pf. の考えによると、小詞 *ne* は、本来「類似あるいは形態 (Aehnlichkeit oder Gestalt)」を意味し、「語の強調あるいは表現の強化 (zur Hervorhebung eines Wortes oder zur Verstärkung des Ausdruckles)」の働きをする。例：

Schischam *ne* 「人 (der Mensch)」

Bunki *ne* 「番人, 見張り (die Wache)」

Moschinne 「島 (die Insel)」 *moschiri ne* の代わり

Kamun 「神々 (Götter)」 *kamui ne* の代わり

訳の中には、一体何によって「語あるいは表現の強調」が表されているのだろうか。何によっても表されていない。人間 (*schischam*) は人間のまま、番人 (*bunki*) は番人のまま等である。はたして、それらに定冠詞が付けられていること (それは間違いではあるが) によって表わされているのだろうか? 次の小詞を見てみよう。

2) *he* あるいは *pe* は不確実, 疑いを表す (*He oder pe bezeichnet die Ugewissheit, den Zweifel.*)

例: *Netopake-he* 「体 (der Körper)」

何によって訳の中に「戸惑いあるいは疑い」が表されているのだろうか？何によっても表されていない。あるいは上記と同じ定冠詞によってか？

これらの小詞を検討する際に、Pf. が犯した重大な誤りは、もう一つの別の小詞 *wa* (ba) の場合と同様、それらの小詞が名詞の語尾ではないということにある。つまり、これらの小詞を名詞とともに分析すべきではない、ということにある。これらの小詞のそれぞれが決まった意味をもち、それぞれが意味を変えずに、名詞の後ろにも、他の品詞の後ろにも置かれる。このため、これらの小詞は、Pf. が後で行っているように、それらの小詞の説明のために、個々の語ではなく、フレーズ全体を例に挙げて、個別に検討を加えるべきである。そうしないと、それらの小詞の意味が不明のままになる。

格の記述に際して、Pf. は、呼格がいくつかの語に存在しているにもかかわらず、呼格についてまったく言及していない。たとえば、*ájno* は *ájnu* 「人」という語の呼格であり、成人の男性に呼びかけたり、話しかけたりするときのみ使われる。多くの人は、そのことを知らずに、*ajnu* ではなく、*ájno* と書いている（その中には Pf. も入っている）。子供の意の語の呼格は *kájno!* である。*kájno* は *khyekatstsi-ajno* の短縮されたもの。

Pf. は、生格に関して、それが他の名辞の前に置かれることによって表されると正しく述べている。しかし、小詞 *un* が「生格の明確な印だが、極めてまれにしか用いられない」と間違っって主張している。*un* は Pf. によって提示されている例からも明らかのように形容詞の語尾である：

Ento-un mushiri kamui 江戸の君主

「～といっしょに (*mit*)」を意味する小詞 *ani* がいかにして対格を形成するのに役に立ちうるかについては、Pf. 自身にその解決を任せる。なぜなら、アイヌ語の会話の中で私はそのような語結合に出会ったことがないからである。Pf. によって提示されている *Ine-ani* という語は、den Befehl 「命令」と訳されているが、「4人でまたは4人の助けで (*ine* 「4」および *ani* 「～とともに、～の助けで」)」と訳す必要がある。したがって、ここにあるのは、対格ではなく、Pf. によって後述される具格 (Instrumental) である。

与格に関しては、それは場所への運動を表す小詞 *otta* あるいは *ta* で表されると指摘されているが、それは全く正しい。Pf. は、後者の小詞について、「位置を示す小詞 (Locativpartikel)」にすぎないと述べているが、それは誤りである。*ta* は *okhta* の短縮であり、ロシア語の *вЪ* (*v*) に完全に対応している。つまり、或る場所での状態も或る場所への移動も表す。つまり、*tishe okhta* は「家で」も「家へ」も表す。たとえば、*tishe okhta gókhke* 「家で寝ている、家にいる (ある)」、*tishe okhta akhgúnke* 「家に運び込む」。人に対しては、*okhta* あるいは *ta* がロシア語の *къ* (*k*) でも訳され、したがって与格を表すことになるだろう。たとえば、*tonu okhta kambenujè* 「旦那 (の所) へ手紙を書く」。

Pf. の奪格 (Ablativ) はロシア語の生格や前置格に対応するが、造格には対応しない。なぜなら、Pf. の奪格は、小詞 *orowa*, *orowano* 「～から」と *kari* によって表されている (Pf. によれば、

*kari* も同様に「～から」を意味しているということであるが、実際は、ロシア語の по, вдоль по「～に沿って」と訳される)。例えば, *kina kari oman* は「草むらに沿って行く」, *naj kari makan* は「川に沿って上流に行く」となる。したがって、この小詞の例は, Pf. では誤訳されている。

Pf. は、名詞を検討するところで、名詞と名詞をつなぐ小詞について必要もなく述べている。なぜなら、これらの結合は名詞だけでなく他の品詞の場合でも見受けられるからである。これらの結合については小詞自体を検討する際に述べる方が都合が良いし理解しやすい。

## 形容詞

形容詞の分析に際して、著者<sup>(9)</sup> は、形容詞語尾に何の注意も払わなかった。名詞や他の品詞の語尾に何の注意も払わなかったのと同様である。このことから記述に混乱が生じている。なぜなら、著者は、それぞれの品詞に特有の語尾を知らなかったので、品詞を混同している。例えば、形容詞の中に、前置詞 *ani*「～といっしょに」や副詞 *mojrino*「ゆっくりと」が入っている。

Pf. は、アイヌ語の形容詞の比較級が *poronno*「多くの」、*pujno*「強く」、*sonno*「正しく、確かに」の語によっては作ることができないと述べているが、それは正しい。しかし、彼は、ダヴィドフが自らの語彙集で示したように、比較級をつくるための小詞 *na*「さらに」の使用を認めないが、それは正しくない。*akkaru jupki* (strammer「よりたくましい」) (*rigtig*<sup>(10)</sup>: stærker oder tapferer 正しくは、「より強く、あるいは、より勇ましい」) が唯一の真の比較級の例であると主張しているが、それはもっと正しくない。もっとも、この例からは、類例の少なさのために、いかなる規則も導き出すことをしてはいけないと著者は指摘しているのだが。形容詞の前にある *akhkari* は「かなり、十分に」、*yukhke* は「強い、頑健な」等々を意味する。表現全体では、「より強い」という意味では決してなく、「かなり強い」という意味だろう。

このように Pf. 自身や彼が利用した語彙集の編者たちは、*pono*「少し」という語を使った比較級の形成を指摘していない。たとえば、*pono-pono pirika* (少しだけより良い)、*tambe pono pirika*, *tambe pono ven*, (これの方が良いが、それはより悪い) などである。すべての性質形容詞の最上級を表す *eruè* (*ruj*「強い」から) という語も Pf. は知らないままだった。

形容詞についての論文のまとめとして、Pf. は以下のことを述べている。アイヌ語の形容詞は、日本語と同じように、動詞への品詞転換の際に一定の小詞が用いられ、さらに、その場合、*verbum substantivum* は語結合の中で考えられなければならないということである。しかし、Pf. は、実際に形容詞から動詞をつくるのに役立つような小詞について一言も述べていない。しかし、彼

(9) Pf. (プフィツマイエル) のこと。

(10) *richtig*「正しい」の誤りか？

がそんなにひどくない語彙集を使っていたら、そのような小詞を簡単に見つけただろう。たとえば, é'n'ki「鋭い」, eén'ki「鋭くする」, sése「熱い」, sése-kh-ka「温める, 熱くする」。ここでは語頭の e は, 語末の ka (kara「~にする」の短縮)と同様に, 動詞を作るための小詞である。この他に, Pf. は, 実際にはけっして形容詞から動詞を作る上で役に立たない *wa* と *na* という小詞をまったく誤って引用している。すなわち, Pf. によって例に出された *pirika-na!* という例と同様に, *na* は日本人がまったく見当違いにアイヌ語に導入した(性質形容詞, 数量形容詞および副詞ともに用いられる)感嘆の小詞である。これは, *pirika*「良い」から作られており, ロシア語で *знатно!*「見事!」, *отлично!*「すばらしい!」と訳するのが一番良い (Pf. では *es ist gut*「素晴らしい」と訳されている)。いったいこのどこに形容詞から動詞の形成が問われているのだろうか。*Va* は実際には動詞の小詞であるが, 形容詞から動詞ではなく, 動詞から副動詞をつくるのに役立つ。たとえば, *omanova ekh*「去って, 戻ってきた」は, *oman*「去る」から。

## 数 詞

数詞についての論文は Pf. のアイヌ語の文法の中で良い方の部分である。残念ながら, ここでも筆者は一つの明確な正書法を選ばずに, 日本語によるあらゆる歪曲を方言的相違として導入した。このことで, 彼はアイヌ語研究を他の人にとって困難にし, また, 一度ならず自らをも誤解に導いた。このため, 彼のもとでは「1」は, アイヌ語で *ashikine*, *ashikini*, *ashikineppu*, *ashikinepp*, *ashikinepf*, *ashikinippu*, *ashikinipp* および *ashikinipf* となる。「5」は *schine*, *schne*, *sne*, *schini*, *schinepp*, *shneppu*, *schnep*, *schepf* などである。このような正書法から導かれた嘘の結論の例として, 私は *schine-wane-hots*, *schne-wano-hots* (200) という語を指摘する。Pf. はそれを方言的な相違と認めているが, 実際は, それらは専らアイヌ語の無知から生じたものである。*go* は 20 を意味し, 日本人によって導入されたこの語のバリエーションは *gots* (松前アイヌ)あるいは *gotsi* (サハリンアイヌ)である。*go* は, われわれの計算の基礎となっている数 10 よりも, アイヌ語では基本的な計算の単位となっている。計算の際に使う指が手には 10 本しかないので, 10 という数は, さまざまな民族のもとで基礎となっているが, 一方, 20 という数も同様に他の民族の計算の基礎となっている。なぜなら, 裸足であれば, 計算のために足の指も使うことが容易だからだ。フランス語には, *quatre-vingt* (80) や *quatre-vingt-dix* (90) という語に, このような 20 を基本の数とする計算の痕跡が今にいたるまで見られる。アイヌの人々の間では 20 という数はさらに高度な計算の基礎となった。計算の単位としてそれは名詞の意味を持つ。つまり, アイヌ語の 20 という数は, ロシア語の *десяток*「10, 10 個」に倣えば, *двадцаток*「20, 20 個」(ロシア語にこのような語があるとすればだが) のような語で表されることになる。また, この数詞の前に全ての基本数詞を置くことができる。つまり, *sine go* は「20 (1つの 20)」(*ciné* は「1」), *tu go* は「40」(*tu*「2」), *tre go* は「60」(*tre*「3」), *van-go* は「200」(*van*「10」)。

vángo または短縮の váno は, 新たに, さらに高度な計算の単位となり, 今度は, さらに, その前により単純な数詞を持つことができる。たとえば, Sne ván-go あるいは短縮して sne váno は「200」。日本人は, go が子音に続くところではどこでも起こるこのような短縮の意味を理解せずに, snevano という語にすでに短縮された形が入っている gotsi あるいは gots を再び付け加える。このように, schne-wane-hots も schne-wano-hots も両方ともその正書法は意味がない。しかし, Pf. は, それらの語をためらわず説明し, wane は定語的小詞 ne をともなった wan-ne の代わり, wano は形容詞的小詞 (Adjektivpartikel) no をともなった wanno の代わりとなっていると述べている。

## 代名詞

言語研究に際して良き試金石となるのは, 代名詞の知識である。おそらく話し言葉において代名詞がどんなに重要でも, 実際には, 代名詞の正しい利用の習得はずっと遅くなる。まあまあだがロシア語で何とか自分の意思を表す外国人に会うことが多くある。たとえば, мой зобакъ (正しくは, моя собака 「私の犬」), моя говорил (正しくは, я говорил 「私は言った」) など。Pf. が利用した語彙集の編者たちは, 共通の運命を免れなかった。つまり, 代名詞についての Pf. の論文から, これらの編者たちは, 中国人が私達とロシア語で話すのと同じくらい, アイヌ語が下手だったことが分かる。このため, ロシア語の代名詞の я 「私」に対して, ku (対格では, ku-ani あるいは, 短縮して káni 「私を」), tschókai および tsi-kotsu というアイヌ語の代名詞が示されている。また ты 「君, あなた」に対して代名詞 i (対格では i-ani あるいは短縮の yani 「君を, あなたを」), i-tschokai (「君たちを, あなたたちを, あなたを」としても; Pf. によると als höfliche Anrede 「礼儀正しい呼びかけとして」), anokaj (「君たち, あなたたち」をも意味する) や i-koro (Pf. によると, i 「君, あなた」および koro 「～を所有する, ～を手に入れる」から作られた「君, あなた」あるいは「彼」に対する丁寧な表現)。この際, Pf. は, 本来, 複数単数と語形が異なるので, たとえば *tschokai-utare* 「私たち」のように名詞の部分で複数単数が表されうると述べている。このように人称代名詞がたくさんあること (一人称で3つ, 二人称で4つ) は, Pf. を指導した人たち<sup>(11)</sup> がアイヌ語の代名詞を理解していないということをはっきりと示している。ここはアイヌ語の構造を詳しく述べるべき場所ではないので, ここではアイヌ語の人称代名詞を簡単に示すと同時に Pf. の間違いをも示す。

*Chokaj*, 短縮して *chi* (Pf. では *kotsu* を付け加えて, *tsi-kotsu*) 「私は」。

*Anokai* 「私たちは」(しかし, Pf. が言うように「君は, あなたは, 君たちは, あなたたちは」ではない)。

(11) Pf. が利用した語彙集の編者を指しているであろう。

Eani (短縮して ean, e) 「君は」(したがって, Pf. が iani または yani が「君を」を意味すると述べているのは誤り)。

Echokaj, 「あなたは, あなたたちは」(Pf. では i-tschokai 「君は, あなたは, あなたたちは」。

Kuani, 短縮形の ku は, もともと「私の」を意味するが, 使われるとき, しばしば *chokaj* 「私は」と置き換わる。

このような人称代名詞と所有代名詞の混同はアイヌ語の構造, つまり名詞を他の名詞の前に置くことによって関係形容詞に移行するという名詞の性質による<sup>(12)</sup>。代名詞は本質的に専ら人称にかかわる名詞であるので, それらを他の名詞の前に置くと, それらを関係形容詞(もちろん, 人称にかかわる)に, つまり人称に関係する所有代名詞に変わる。このため, *chokaj po* は「私の子供」を意味するだろう。人称代名詞としてだけでなく, 所有代名詞としても同じ語を使う習慣は次のことを生み出した。もともとは「私の」という意味をもっている kuani という語が「私は」の意味でも用いられる。一方, eani は, 二人称として「君は, あなたは」も「君の, あなたの」も意味しているので, 特別な所有代名詞はいっさいない。

人称代名詞与格の in' (一人称) および etsi (二人称) の与格は, Pf. にはまったく不明のままであった。

他の代名詞に関しては, Pf. では, さらに大きな混乱がある。つまり, *néjta* 「どこへ」(Pf. では *nê-ta, ni-da, was?* 「何が?, 何を?」), *ne-wa-an-be* 「もしこれがあるなら」(Pf. では, *welches?* 「どの?, どちらの?」, *was für eine Sache?* 「どんなもの?, どんなこと?」) などが代名詞に分類されている。

## 動 詞

Pf. のアイヌ語の文法でもっとも分かりにくく, 混乱しているのが動詞についての部分である。「動詞の場合でも, 通常, 法も時制も区別されない。唯一の変化は一定の語や小詞を動詞の前後に置くことにある。それらの語や小詞のいくつかは名辞とも動詞とも一緒に用いられる。」

このような前書きの後に, 動詞の前後で使われる小詞の詳しい分析が続いている。これらの小詞の大部分の意味は筆者には理解できていない。それらの内のいくつかは動詞とともに分析されているが, まったく根拠がない。なぜなら, それらの小詞はアイヌ語の語根に属していて, 語根として動詞ばかりでなく他の品詞をも形成するからである。たとえば, Pf. は, 小詞 *ko* を *yayo-kote* 「自身, 自身を」の短縮形と理解して, “selbst 「自分自身」”と訳しているが, それは全く根拠がない。なぜなら, 小詞 *ko* は, *ukò* (「お互いに, お互いへ」などの意) という語の短縮であり, さらに, 動詞の小詞としているが, 彼の訳から分かるように, 何も表さない小詞となっている。

(12) 原注 参照: Буслаевの Грамм. Русского языка (ロシア語の歴史文法), p. 206

このため、彼は次の例を挙げている。ko-a-nukaru を sehen 「見る」と訳しているが、*nukaru* も彼は同じく sehen 「見る」と訳している。ko-sireba-i は ankommen 「到着する」と訳しているが、sireba も ankommen 「到着する」と訳している。小詞 *ko* が *uko* の短縮であって、*yénkota* (Pf. では *yaikote*) の短縮ではないことは、それが現れるすべての語を分析することで分かる。いくつかの語ではそれは直接 *uko* と置き換わっている。たとえば、*kotamá* あるいは *ukotamá* 「つけ加える、添える」(*uko* 「お互いに」および *ama* 「置く」から)、*kosinà* あるいは *ukosinà* 「結び合わせる、あるものを他のものに結びつける」(*sinà* 「束ねる、結びつける」から)。

これと同様に、Pf. は他の小詞の大部分もよく分かっていない。そのため、動詞の前に置く小詞の *u*, *ku* および動詞の後に置く *nu*, *no*, *ya*, *ba*, *a*, *i* (あるいは *e*) および *ko* の意味は Pf. では次のような訳で表される。

- U-nukaru (sehen 「見る」)
- Ku-nu (hören 「聞く」)
- Ku-ramu-tui (erschrecken 「驚かす」)
- A-nukaru (sehen 「見る」)
- I-nu (hören 「聞く」)
- I-nukaru (sehen 「見る」)
- E-sireba-i (ankommen 「到着する」)
- Ko-a-nukaru (sehen 「見る」)
- Ko-sireba-i (ankommen 「到着する」)
- Afun-nu (eintreten 「入る」)
- Anu (annu) (haben 「持っている」, es gibt 「存在している」)
- Anno (haben 「持っている」, es gibt 「存在している」)
- Afun-ke-ya (eintreten 「入る」)
- Ramu-tui-ba (erschrecken 「驚かす」)

これら全ての小詞の間に一体どのような違いがあるのか聞いてみたくなる。訳から分かることは、いかなる違いもないということである。つまり、*u-nukaru* は「見る」、*a-nukaru* は「見る」、*i-nukaru* は「見る」、*ko-a-nukaru* は「見る」で、*nukaru* だけでも「見る」である。*afun-nu* は「入る」、*afun-ke-ya* は「入る」で、*afun* だけでも「入る」など。しかし、Pf. の文法に関しての本当のお笑い草は、小詞 *schiiui* あるいは *schioi* の分析である。Pf. によると、それは、*bezeichnet das Wollen, das Begehren* (意志、願望を意味している)。例として、次の表現が引用されている。

- ibe-ru-schiiui* (essen wollen 「食べたい」)。*ibe-ru* das Transitivity als Ehrenzeitwort statt *ibe* (つまり、*iberu* は *ibe* 「食べる」の代わりにの尊敬動詞としての能動動詞)。
- iku-ru-schiiui* あるいは *iku-ru-schioi* (trinken wollen 「飲みたい」)。*iku-ru* wieder das



Transitivum statt iku (つまり ikuru は, iku 「飲む」の代わりに能動動詞)。

このような Pf. の説明の謎とともに, その奇妙さを理解するためには, アイヌ語に *ipè* 「食べる」(Pf. では *ibe*), *ikù* 「飲む」と *trusuj* 「欲する, 望む」(*tru* は *ru* と発音することもある) という語があることを知っている必要がある。*ipè* 「食べる」から派生した動詞 *ipéru* 「食べさせる」, *iku* から派生した動詞 *ikúrye* 「飲ませる」がある。アイヌ語の語を音節に分け, 音節自体を数十通りに書くという自らのやり方に忠実に従う Pf. は, *ru* が *re* と等しく, *ipéru* と *ikúru* がそれぞれ *ipyéru* と *ikúre* に同じだと考えた。このため, *ipe trusuj* 「食べたい, お腹がすいている」および *iku trusuj* 「飲みたい, 喉がかわいている」というフレーズの中で, 彼は *trusuj* という語から音節 *tru*, *ru* を取って, *ipè* や *ikù* の語に付けた。こうして, 彼の著作の中に, *iperu* および *ikuru* は, 中動の *ipè* および *ikù* の代わりに, 能動動詞として, しかも尊敬語 (Ehrenzeitwort) として出現した。なぜなら, あたかも願望を表しているような架空の小詞 *shiuuj* の存在を認めると, これらのフレーズは「食べ物を与えられることを望む, 飲み物を与えられることを望む」と訳さなければならず, つまり望む人には命令のようなものが現れるからである。これらの例は, 2, 3 の酷い語彙集のみに従うと, 如何に容易に混乱してしまう可能性があるかを十分に示している。

本来, 動詞の小詞<sup>(13)</sup> に属している他の幾つかの小詞は, Pf. によって正しく理解されている場合もあるし, そうでない場合もある。つまり, 中動の動詞を能動動詞に変える小詞 *te* や *ke*, あるいは *ki* は正しく理解されている。しかし, Pf. にはそれらが *kónte* 「～させる」と *ki* 「する」から生じているということは不明のままだった。そして, 彼はまたも尊敬語 (ehrenzeitwort) に助けを求める。すなわち,

*nukánte* 「示す」(*nukara* 「見る」および *konte* 「～させる」から)。

*akhgúnki* 「入れる」(*akhgun* 「入る」および *ки* (*ki*) 「する, ～させる」から)。

これらの動詞の Pf. の説明は次の通りである。

*nukan* - *te*, *nugan* - *de*; *nukaru-te* の短縮 (abgekürzt) 「指し示す (*zeigen*)」, 尊敬語として (als Ehrenzeitwort) 「見る (*sehen*)」

*afun* - *ke*; 「入らせる (*eintreten lassen*)」, 尊敬語として (als Ehrenzeitwort) 「入る (*eintreten*)」

動詞の語根の音節末に見られる変化について, Pf. では, それらの変化は「一般に条件法 (Potential) の動詞, 単純または変形された形動詞, まれには過去時制または未来時制に対応している」と述べられている。そして, これらの言葉は, 筆者が動詞についての論文の初めで言ったこととまったく矛盾をしている。例として, 彼は語末の母音の *a* への変化を挙げているが, 不正確である。たとえば, *nukara* (「見るかもしれない (*sehen mögen*)」, 「見るだろう (*sehen werden*)」, あるいは「見た (*oder gesehen haben*)」, *nukaru* から), *mokora* (*mokoro* から) といった語がある。

(13) 例を見る限り, 助動詞的な働きをしている。

それらの変化は Pf. では entspricht dem Potential mix jeder temporalen Nebenbedeutung, 実際は, 単なる正書法のバリエーションでしかない。つまり, nukara は「見る」を意味し, 一方 nukaru は歪められた正書法である。mokora は mokoro 「眠る」の歪められた正書法である。しかし, 形動詞や副動詞を表す小詞 *va* および *an* 以外に, 彼はアイヌ語の動詞の変化に実際に役立っている小詞を一つも引用していない。このように, 彼は, まったく理由もなく能動相と被動相の違いを否定し, 命令法や直接法の語形, 現在, 過去および未来時制の形を見つけていない。しかし, アイヌ語にはこれらのために特別な補助的な語がある。

このようにアイヌ語の動詞変化を知らないことは, Pf. の論文全体に反映されている。同じ動詞の同じ語形でも, 彼は気の向くままに翻訳している。ある時は未完了で, ある時は命令法で, ある時は直説法で。ある箇所では現在形, またある箇所では過去形, さらにある箇所では未来形を見かけるし, ある箇所では一人称とともに, またある箇所では三人称とともに, さらにある箇所では二人称とともに。このような訳が生まれるのも理解できる。なぜなら, 語彙集にあるフレーズは, 言語研究の際にノートに書き留めるのと同じように, 記録されていたからである。ところで, アイヌは, 言語研究している記録者に多種多様な事物や行為について話した。しかも記録者の言語の知識のレベルに合わせた, つまり私達が中国人と話すときと全く同じように, 記録者に分からない言い回しを抜かして語った。たとえば, *ománte* 「送る」を Pf. はある箇所では未完了の法<sup>(14)</sup>で(「行かせる (gehen lassen)」, 「送る (senden)」, 法についての論文の中で), またある箇所では直接法の一人称単数で (ane - otta oman - de 「私はそれを彼に送る (ich schicke es ihm)」, 小詞 ane についての項で), さらに別の箇所ではそれを命令法とみなしている (tan - guru - otta omande 「この人のところへ到着させなさい (lass es zu diesem Mensch gelangen)」, 小詞 otta についての論文で)。実際, アイヌはお互いの間でも, 話の流れ自体から, それがなくとも意味が分かる多くの言葉を普通省略して話す(話し言葉において, すべての民族がするように)。しかし, アイヌが自分の考えをはっきり述べたいときにそのことは起きない。まして, 書き言葉<sup>(15)</sup>では言語を知らない人を混乱させないように訳では正確さを守るべきである。

## 副 詞

副詞についての論文は, Pf. では最良のものに属する。しかし, ここでも筆者は資料の不完全さのために誤りを免れていない。たとえば, nischatta は, この語が「午前, 朝に」を意味するにもかかわらず, 「明日」(morgen) と訳している。また, *oyásima* (oyà 「別の, 他の」および *sima*

(14) 文法における法のこと。

(15) книжная речь の訳。アイヌ語には文字はなかったので, 「堅い言葉, 公で用いられる言葉」といった意味で用いられているのだろう。

「明日」から「明後日」を *oya-schiun* と書き, von *oya* “ausserhalb” und *schiun* sonst “verwelken”, hier von ungewisser Bedeutung (つまり, *oya* 「～なしで」と *schiun* から. *schiun* は, 「枯れる, 萎れる」を意味する場合もあるが, ここでは意味不明である) という言葉で説明している。私<sup>(16)</sup> は, 筆者<sup>(17)</sup> がアイヌ語の十分なデータの蓄積を持たずに研究を行うことがどんなにリスクが大きいかを示すために, 故意に筆者のオリジナルの言葉を訳を付けて引用している。同じように信頼できない説明は, Pf. ではいたるところで出会う。副詞の意味の違い以外にも, どの文法書でも副詞とみなされていない語結合が Pf. では全く根拠もなく副詞として扱われている。もっとも, Pf. はそれらの語結合を副詞に変えようと努力はしている。たとえば, 彼の著作には, 場所の副詞として *tan-kotan-ta* (「ここで (hier)」, 原文に忠実であれば, 「この場所で (an diesem Orte)」) が挙げられている。*Tan kotan ta* は「この村で」(*tan* 「この」, *kotan* 「村」, *ta* 「～で, ～の中で」) を意味するが, 決して「ここで」を意味しない。しかし, このような複合副詞の存在を許すなら, どんな名詞からでも「～中で」や「この」を付けて副詞が作られることになる。時の副詞に入れている *hosche-numa-ni itoko-ta* (一昨日) といったフレーズについても同様のことを言わなければならない。

### 前置詞

アイヌ語の前置詞は語の後ろに置かれる。このため, Pf. は全く正しくそれらを後置詞 (Postpositionen) と呼んでいる。ロシア語には, これに相当する語がないので, 前置詞 (предлог) という語を使わなければならない。

前置詞についての論文は, Pf. ではかなり上手くまとめられている。ただ, Pf. は, 根拠もなく, 前置詞の中に否定の小詞 *sakh* (*schaku*, *schak*, *schakf*) 「～でない, ～なしで」や無人称動詞 *ishamu*, 日本語要素の加わった *ishamuka* を入れた。これはロシア語の *нет* と同様に, 先行する否定の小詞 *sakh* および *an* 「～が在る」から生まれて, 否定の副詞の意味で使われている。*ischamu* はサハリン・アイヌ語では *isyam* (あるいは *isam*) と発音され, この語は Pf. で引用されている *teke-ischamu* 「手なしで (*ohne Hände*)」のような複合語の中で, アイヌ語が下手な人が相手のときだけ用いられる。というのは, 「～がない」という語は言葉の学習で真っ先に習得されるからだ。だから *teke-ischamu* というフレーズは「手なしで」ではなく, 「手がない」, まさに「手が存在しない」という意味だ。同様に *hoku-schak* は「夫なしで (*ohne Mann*)」ではなく, 「未婚の」を意味する。たとえば, 「彼女はいま夫なしで暮らしている」というフレーズで「夫なしで」という語を *hoku-schak* という語で訳してはいけない。なぜなら, 女性は夫があっても, 夫が留守

(16) M. M. ドプロトゥヴォールスキーのこと。

(17) プフィツマイエールを指す。

で暮らすこともあるからだ。「手なしで、夫なしで」のようなフレーズをアイヌはわれわれよりずっと複雑に、つまり副動詞、形容詞の形で、あるいは小詞を使って表す。たとえば、「私はナイフなしでこれを作った」は *makiri isyam-chiki tambe ku kara*, つまり「私はナイフがないとき、これを作った」、あるいは、*makiri kham ivanke-chiki tambe ku kara*, つまり「私はナイフを使わずにこれを作った」。最初のフレーズでは *isyam* という語に動詞的小詞 *chiki* 「～すれば、～する時」を付け加えると、*isyam* という語の意味を前置詞としてではなく、動詞として直接示す。

### 接続詞

この品詞は、Pf. の著作でかなり上手くまとめられている。ただ接続詞と接続詞の間にしか副詞の *schio* (*somo*<sup>(18)</sup> は、*isyam* 「～がない」と同じ) や *henne* (サハリン・アイヌ語では *khannye*) は置かれぬ。それらの語の起源や意味は *isyam* と同じである。

### 間投詞

Pf. の論文で見つかる珍事の一つとして、「間投詞の意味は繰り返しによっても表現される」ということを立証しようとしている例を指摘する必要がある。つまり、*bits-schioro* (*die Krümmung eines Flusses* 「川のカーブしているところ」) という語から生まれた表現として、*bits-schioro-schioro-schioro-schioro* 「おお、川の曲がりよ (*o ihr Krümmungen der Flüsse!*)」がある。

他の場合では、大胆で、機転も利く Pf. があえて説明に取りかからなかったほどの語の歪曲の例として、*yangarapte* 「こんにちは」を挙げよう。これは *inanukarakhte* (*nanu* 「顔」、*kara* 「する」、および *te* 「手」から構成され、さらに語頭に動詞的小詞 *i* が付加されている。つまり、アイヌがよく行う「顔に手をもってくる」) の代わりに用いられている。

### 小 詞

小詞の研究は、現在検討中のこの論文において、大きな部分を占めている。最新の二つの論文である「語の順序」と「複合語について」とともに、ここでの小詞の研究は他の文法書の統語論の代わりをするものである。実際、Pf. の論文において、アイヌ語の語の格変化や人称変化に関わることがあまりにも欠除しているので、その欠けた部分を補う必要性が感じられていたことは言うまでもない。Pf. は、自分が小詞と呼んだ約 60 語を分析した。それらの大半は多義なので、こ

(18) 原文のまま。

の短い批評文で Pf. の論文における内容豊富なこの部門を詳しく検討することは決してできない。そのため、この部門の長所について全般的なコメントを一つだけに限って述べなければならない。この部門のアイヌ語の単語の正書法に関しては少しも改善されていない。ここでも、しばしば誤った解釈へ導く全く同じ誤りが見受けられる。Pf. の小詞の研究に関して言えば、それらのいくつかはさまざまな品詞に属している完全なる自立語であるので、その品詞を研究する際に一緒に検討しなければならない。該当する語は、前置詞 *bakkuno* 「～まで (*pákhno*)」、接続詞 *bateki* (方言では *padigi* も) 「～するとすぐに (*páteki*)」、形容詞 *ájkapu* (*aigapp*) 「不器用な、能力がない」である。ある場合にある特定の意味を持つ小詞も、Pf. では、何の意味ももたないようなフレーズの中で見受けられる。ロシア語の俗語であれば、*тово, тово-вонъ, тово-вонъ-де, тово-какъ-бишь-его, тово-вонъ-ка, какъ-бишь-его, примером-будучи-сказать* 「あのう。そのう。ええと。ほら。あの。」などに類するフレーズである。Pf. 自身、小詞 *ne, wa, na, ka, koro, koratsi, taban* などの分析から分かるように、多くの小詞に似たような意味があることを認めている。文法書作成の際に、このような語句を絶対に引用すべきではなかったであろう。話し上手ではない人、あるいは聊か愚かな人達からどんなフレーズを耳にしようが、それはどうでもよい。何も言い表さず、言語の精神にも合致せず、また、たまたま話し上手でない人達によって使われるこのようなフレーズが文法のために何の役に立つのか。とくに小詞の分析に際して、Pf. には多くの混乱があるが、このようなフレーズからは混乱以外の何もなく、もちろん、これ以上何の期待もできない。

小詞が明確で不変の意味を持つ場合の分析に関しては、一般的に言って、資料が不完全にもかかわらず、かなり充実し、満足できるものである。Pf. は多くの場合、小詞の解釈にまれに見る洞察力を示した。さらに、アイヌ語のフレーズの比較対照とそれらからの一般的規則の抽出において、並外れた、純粋にドイツ的な勤勉さを示した。しかし、ここでも彼は『藻汐草』で引用され、説明されているフレーズを信頼し過ぎてしまった。

全般的な批判の証拠として、Pf. が分析した60の小詞の内の5番目と11番目の小詞である *no* および *ka* の記述から一部だけを例に引く。なぜなら、Pf. の記述を完全に分析するには、二つの小詞でもここではかなりの紙面を割いてしまうからである。*No, nu*。

「小詞 *no* やその方言の *nu* を付け加えることで、名詞は副詞に変化する。いくつかの副詞はもうそれ自体この小詞で終る。つまり、*schionno* 「実は (*шюнно*)」、*ohonno* 「長く、長い時間 (*огонно*)」。しかし、この語の起源は *oro* (*ohô*) 「深い」のようである。」<sup>(19)</sup>

アイヌ語の語の正書法に関しては、Pf. は *sónno* の代わりに *шюнно* (*schionno*) と誤って書いているということを指摘しておく必要がある。ここで、彼はダヴィドフの正書法に基づいている。つまり、ダヴィドフではこの語は *шюнно* (*shünnno*) と書かれている。ダヴィドフの時代、我々の

(19) この引用文は Pf. のもの。

ところでは<sup>(20)</sup>, ë (jo) の音はこのように書かれていた。例えば, все とか идет という語は *всiò, uòìòm* (すなわち *всè* とか *идèт*<sup>(21)</sup>) と書かれた。сонно (*sonno*) という語をダヴィドフにおいてこのように書かれているということは, 多くのアイヌの人たちが *s* と *sh* の中間の発音をしていることを想起するならば, 理解できる。しかし, 2音節の語 *shìònno* (*sónno*) は, ダヴィドフによって採用された記号を省略した後, Pf. において3音節の *shionno* に不正確に変更されている。Pf. の *ohò* はダヴィドフで *ogo* と書かれている。したがって, Pf. の正書法は語彙集 *Mo-sivo-guza*<sup>(22)</sup> にお目にかかったことのない者には理解できない。なぜなら, Pf. は自分が使用した記号を説明することが必要だと考えていなかったからである。そのため, サハリンでは, この語は *okhgò*, つまり最後の音節にアクセントを付けて発音されているということを指摘しておく。しかも, Pf. はアクセント記号を用いないので, *ohò* という単語の中で彼が使っている記号は何も表さない。

上記の引用文における文法規則に関しては、「名詞は副詞に変わる」というフレーズの代わりに, Pf. は「形容詞は副詞に変わる」と言いたかった。なぜなら, 副詞についての論文の中で, 彼は, 小詞 *no* を加えることによって, 形容詞が副詞へ変わることにについて語っている。「それ自体」すでに *no* で終わっている副詞の例として, 誤って *огонно* (*ohonno*) という語が引用されている。「長い間, 長く」は, サハリン・アイヌ語では *okhgorono* (短縮して *ogónno*) である。okhgorono という副詞は, 形容詞の *okhgoro* 「長い, 長期にわたる」から生じている。

「この小詞を付加することによって, 名辞が動詞の意味を得る。Nivashino-*no* (*niwaschino-no*) 「しつこくねだる, 志向する」は, *nivashino* (*niwaschino*) 「賢い, 賢明な」から *yupki-nu* (*jupuki-nu*) 「頑健である」は, *yupki* (*yupki*) 「強い」から, *fura-nu* (*furâ-nû*) あるいは *fura-no* (*fûra-no*) 「匂いがする, 嗅ぐ (*riechen*)」は, *fura* (*fûra*) 「匂い」から, *Vayashino* (*wayaschino*), さらに *yavashino* (*yawaschino*) と *nivashino* (*niwaschino*) 「賢明な, 思慮深い」も形容詞である。Vayashino-guru は「思慮深い人」である。」<sup>(23)</sup>

この引用文中のアイヌ語の正書法に関しては, またしてもここで, *fura* や *nu* の上の記号の説明がなされておらず, しかもまったく不要な記号に出くわす。一方, 文法規則に関しては, それはまったく嘘である。Pf. が利用した語彙集の編者たちは, アイヌ語の語を理解できずに, それらを不正確に訳した。この不正確な訳によって, Pf. 自身も混乱した。規則そのものの記述の中にも, Pf. には不明なところがある。その記述の中に, 小詞 *no* を付加することによって名辞が動詞の意味を得ると述べられているが, いったいそれがどんな名辞なのか述べられていない。一方, この例からは, ここでは名詞と形容詞が考慮に入れられているということを導き出すべきである。

(20) 「ロシアでは」という意味。

(21) 原注 既刊のフォンヴィージン (Фонвизин) の著作を参照。

(22) 『藻汐草』のこと。

(23) この引用文は Pf. のもの。( ) 内が Pf. の正書法によって書かれた語。

つまり、あたかも名詞 *fura* 「匂い」から動詞 *furánu* あるいは *furáno* 「匂う (あるいは嗅ぐ)」が、また、形容詞 *yupki* から動詞 *yupkinu* 「頑健である」が生じているかのようである。しかし、実際、*fura nu* (日本語の正書法と発音によると *khura nu*) は、独立した語ではなく、二つの語、すなわち、*fura* 「匂い」と動詞 *nu* 「聞こえる、感じる、分かる」の結合したものである。*fura-nu* の中の *nu* が動詞的小詞ではなく、まったく独立した自立した動詞であるということは、代名詞を挟むことによって *nu* と *fura* を分離するのが容易であるということからも明らかだ。たとえば、*tan fura chokaj nu* 「この匂いを私は嗅ぐ」(*tan* 「この」、*chokaj* 「私」)。しかも、「嗅ぐ」という語としては、アイヌの人たちには、もっと使用頻度の高い *khurkhura* という語ある。Pf. がアイヌ語の *fura-nu* の訳語としている *riechen* という語の別の意味、すなわち、「匂う」という意味に関して言えば、*fura-nu* は決して「匂う」を意味していない。この概念を表すために、アイヌは、*khyrákhka* (*khura* 「匂い」および *kara* 「作る」から) や *khyrákhki* (*ki* 「作る、生み出す」から) という動詞を持っている。あるいは、「匂う」という動詞の意味では、単に *khurà* ということの方がより頻繁である。確かに、*fura-no* の他のバリエーション、あるいは、より正確には *furánno* は、実際に、名詞 *fura* および小詞 *no* からできている。しかし、この語は動詞ではなく、「芳香を発する」を意味する形容詞である。*yupki-nu* は *yupki-no* (サハリン・アイヌ語では *yúkhkeno*) の変形された形であり、「頑健である」という意味の動詞では決してなく、「強く、頑丈に」を意味する副詞である。この Pf. の一節で引用された別の語にも同様の誤りがあるが、それらの語のことで足踏みはしないでおう。

「とくに言及するに値するのは、*ашин-но* (*aschin-no*) という語である。この語は、『初め (Anfang)』という意味の名詞として使われる。」

*ashinno*, サハリン・アイヌ語で *asinno* という語は、*asiri* 「新しい」という語からできていて、「新たに、初めて」を意味する。けっして「初め」を意味していない。

このように、Pf. は、小詞 *no* の意味のために、まったく無駄なことなのだが、二つの文法規則を考え出した。

「*ka*, *ga*, *ká*。 *ka* (方言では *ga* とも言う) は、『土地』あるいは『場所』を意味するが、その意味は今では廃れて、複合語 (Zusammensetzungen) の中でしか見受けられない。Kaschoya 『スズメバチ、字義通りは、地面のミツバチ』。 *shiri-ka* 『土地、土壌 (Erdboden)、広場 (Platz)』。この小詞は、『場所』の意味で接辞 (explitivisch) として名詞にしばしば結合される。Schirari-*ga* 『満潮の場所、または満潮それ自体』。 *tô-ga* 『胸、字義通りは胸の部分』。 *Oschioro-ka* 『尻、字義通りは尻の場所』など。」

Pf. の結論の意義について理解するには、この一節だけで十分である。ここで、何も表さなく、全く不必要な *ka* と *to-ga* の上の記号にまたしても出会う<sup>(24)</sup>。 *ra* (*ga*) は、小詞 *ka* の方言バリエー

<sup>(24)</sup> 「*ka* および *to-ga* の上の記号」というのは、*ká* と *tô-ga* の *a* と *o* に付されている記号のこと。

ションではなく、ka とは異なる意味を持つ全く別の小詞である。日本人はこれらの小詞を互いに取り違えるが。

ka は、けっして「土地あるいは場所」を意味するのではなく、kasketa (kasketa, kaske, ka) 「表面」という語の短縮である。たとえば、vakka ka あるいは vakka kasketa 「水の表面 (vakka 「水」)」、kam-kaske あるいは kam-kasketa 「皮膚」(kam 「肉」から) などの表現は同様に正しい。この小詞は、Pf. によって引用された語の中のいくつかにおいても同じ意味をもっている。たとえば、shirariga (schirariga) あるいは、より正確には siraraka は、「表面、満ち潮によって洗われる土地」を意味している (sirara 「満ち潮」から)。しかし、決して「満ち潮そのもの」を意味していない。togà は「胸 (複数)」を意味し、to 「胸」の複数である (したがって、ここで ga は単に複数を示す記号)。to は、「日」の意味でも複数において同様に変化する。たとえば、uturej toga araka 「両方の胸が痛む」、ine toga araka 「4 日間痛む」。この場合、ラテン文字で ga (Pf. はそう書いているが) と、ka と書くことはできず、ha (to-ha) と書く。Oschioro-ka は osoro-kam (osoro 「後ろの」および kam 「肉」) 「尻」の変形された語で、それは意味的にはロシア語の огузок (oguzok) 「しり肉」に等しく、つまり「尻の柔らかい部分」を意味する。したがって、Pf. が oschioro ka は字義通りは「尻の部分 (der Ort des Gesässes)」を意味すると述べているのは、全く理由のないことである。

同様の不正確な語の解釈は、Pf. の論文の最後にある複合語 (von den Zusammensetzungen および Wörter für Zusammensetzungen) の項目でも見受けられる。

例えば、「schiki rapp 『睫毛』は、字義通りでは『目の翼』であり」、目の羽 (trapu 「羽 (複数)」から) ではない。

「kunne-tschupp 『月』、文字通りでは『夜の太陽』である」。一方、kuni chuf は「夜の天体」(kuni 「夜」および chuf あるいは chup 「天体」から) を意味する。

「tschupp-kamoi 『太陽および月』は、文字通りは「太陽の神々」である、なぜなら、tschupp は太陽としても、月としても使われるからである」。一方、chup-kamuj は字義通りで「天体の神 (あるいは神々)」を意味する。

「sike karu 『荷を運ぶ』。sike は、『荷』あるいは『荷を運ぶ』を意味する」。実際、siki karà は「瞬く、目を細める、ウインクする (siki 「目」と kara 「作る」から)」を意味する。一方、「荷を運ぶ」は sikhè ampa (sikhè 「荷」と ampa 「運ぶ」から)。

最後に、Pf. の論文は、アイヌ語の文法書の最初であり、今のところ唯一の試みとして、アイヌ語の研究者の注目に値するものと言わざるをえない。もっとも、Pf. は自分が論文を載せる雑誌の意義を考慮して、自分の結論にもっと慎重でなければならなかっただろうが。